

昔むかし、あるところに、貧しい漁師の若者が、ひとりで暮らしていました。ある日、若者は海へ漁に出ましたが、魚は一匹もとれませんでした。そのかわり、かめがいつびき、網にかかりました。若者は、しかたなく、かめを持って家に帰りました。

次の日、若者が漁に出て、帰って来ると、家の中がきちんと掃除してありました。若者は、

「だれがこんなことをしてくれたんだろう」と、ふしぎでなりませんでした。

次の日、若者が帰って来て、お昼に魚を料理して食べようと火をおこすと、なべには、もう魚が煮てあつて、皿の上には焼いた魚が乗っていました。家の中もきれいに掃除してありました。

「こう何もかもやってくれるなんて、いったいだれなんだろう」

若者は、次の日、漁に出たふりをして、そつと見張っていました。すると、かめのこうらの中から、美しい娘がでてきました。若者は、娘をつかまえていいました。

「それじゃ、おまえだったのか、うちのことをやってくれたのは。まるで分らなかった」

若者は、かめのこうらをこわしてしまいました。娘はもどることができないで、若者の妻になりました。

さて、その国の王さまは、妃になる人をさがしていました。王さまは、国じゅうの娘にヴェールをわたして、いちばんきれいにししゅうをした者を妃にするとおふれを出していました。若者の妻は、そうとは知らず、わたされたヴェールに美しいししゅうをしました。海と魚と船がえがかれていました。

娘たちはヴェールを持って約束の日にお城に行き、若者の妻も、ヴェールを持って行きました。若者の妻がたいそう美しく、そのししゅうがいちばん美しかったので、王さまは、妃にしようと決めました。ところが、若者の妻は、

「わたしには、夫があります」といいました。王さまは、

「では、どうしてししゅうをしたのだ」とききました。

「お妃さまをお探しだとは知らなかったからです」と、若者の妻がいうと、王さまは、

「おまえの夫に、城に来るように伝えよ」といいました。

妻は家に帰ると、若者に、

「王さまが、あなたに会いたいといっているから、行ってくださいな」といいました。

若者は、お城に出かけて行って、

「何のご用でしょう、王さま」とききました。王さまは、

「おまえの妻はおまえにはもつたいたい女だ。そこで、あした、わしの兵隊ぜんぶに魚の料理を腹いっぱいごちそうするんだ。それがだめなら、おまえの妻はわしがもらうぞ」といいました。

若者は、家に帰ると、妻に、

「ああ、ヴェールのししゅうが、災難の元になってしまった。王さまはおれに、兵隊ぜんぶに魚をふるまえとおっしゃるのだ。だめなら、おまえを取り上げると。おまえはおれにはもったいないからだって」といいました。

「じゃあ、王さまにはそう思わせときなさいよ。あなたは、わたしを網にかけた所に行つて、わたしのお母さんと呼んでちょうだい。そして、小さなべをくださいっていうのよ」と、妻はいいました。

若者は、海辺に出かけて行つて、

「お母さん、お母さん、上がつて来てください。あなたからもらいたい物があるので」とよびました。すると、海のまんなかから、ひとりの女の人が出て来て、

「よく来ましたね。何がほしいのです」といいました。

「あなたから、小さなべをもらつてくるようにつて、あなたの娘さんにいわれて来ました」と、若者がいうと、女は、水にもぐつて行き、なべを持って出て来ました。それは、一皿分の料理しか入らないような小さなべでした。

若者は、なべを持って家に帰り、妻にわたしていいました。

「これじゃあ、おれひとり分だつて足りないぞ。王さまの兵隊ぜんぶなんて、とてもじゃないが腹いっぱいにはできないぞ」

「心配することはありませんよ。このなべは、王さまの兵隊の十倍の人数だつて、満足させられるのよ。さあ、行つて王さまと兵隊たちを呼んでいらつしやい」

次の日、王さまは兵隊を引き連れて、若者の家にやつて来ました。兵隊たちが、しつらえられた広いテーブルに着くと、若者の妻は、まず初めに、なべの中から魚のスープをよそつて、ぜんぶのお皿に入れました。それから、なべからパンを出して配りました。次に、煮魚、魚のムニエル、焼いた魚と、王さまに命じられるままに、次つぎとなべから出しました。兵隊たちはみなお腹いっぱいになりました。

こうして、若者は、王さまに妻を取られないですみました。

何日かたつと、王さまは、若者をよんでいいました。

「おまえの妻はおまえにはもったいない女だ。そこで、あした、わしの兵隊ぜんぶにぶどうを腹いっぱいごちそうするんだ。それがだめなら、おまえの妻はわしがもらうぞ」

若者は、家に帰ると、妻に、

「王さまはおれに、兵隊ぜんぶにぶどうをふるまえとおっしゃるのだ。だめなら、おまえを取り上げると。この冬のさなかに、どこでぶどうを手に入れりやいいんだ」といいました。

「わたしはあの王さまのお妃になんかならないわ。あなたは、お母さんの所に行つて、ぶどうの小かごをくださいっていうのよ」と、妻はいいました。

若者は、海辺に出かけて行つて、

「お母さん、お母さん、上がつて来てください。あなたからもらいたい物があるので」とよびました。すると、海のまんなかから、妻の母親が出て来ました。

「よく来ましたね。何がほしいのです」

「あなたから、ぶどうの小かごをもらってくるようにって、あなたの娘さんにいわれて来ました」

母親は、水にもぐって行き、ひとかごのぶどうを持って出て来ました。

若者は、ぶどうのかごを持って家に帰り、妻にわたしていいました。

「これじゃあ、おれひとり分だって足りないぞ」

「心配することはありませんよ。さあ、行って王さまと兵隊たちを呼んでいらっしやい」

次の日、王さまは兵隊を引き連れて、若者の家にやって来ました。兵隊たちが、広いテールに着くと、若者の妻は、小かごから次つぎにぶどうを出して、お皿に盛りました。ぶどうが無くなるより前に、兵隊たちはみなお腹いっぱいになりました。

若者は、王さまに妻を取られないで済みました。けれども、若者は、

「こんども何とかなったけれど、次は何とおっしゃるかと思うと、心配でならないよ」といいました。妻は、

「恐がらなくていいのよ。わたしが付いているじゃありませんか」といいました。

また何日かたつと、王さまは、若者をよんでいいました。

「おまえの妻はおまえにはもつたいない女だ。そこで、こんどは、おまえに連れて来てほしい人間がいるのだ。そいつは、体がてのひらふたつ分の大きさで、ひげはてのひら三つ分の長さでなくちゃならん。それがだめなら、おまえの妻はわしがもらうぞ」

若者は、家に帰ると、妻に、

「たいへんなことになったぞ。王さまは、おれに、体がてのひらふたつ分の大きさで、ひげがてのひら三つ分の人間を連れて来いっておっしゃるんだ」といいました。

「だいじようぶよ。あなたを王さまにしてあげるわ。わたしのお母さんの所に行つて、わたしの弟の豆ちゃんをよこしてくださいっていうのよ。わたしたちの子どもをこねばちの中で寝かしつけてほしいからって」と、妻はいいました。

若者は、海辺に出かけて行つて、

「お母さん、お母さん、上がって来てください。あなたからもらいたい物があるので」とよびました。すると、海のまんなかから、妻の母親が出て来ました。

「よく来ましたね。何がほしいのです」

「あなたから、豆ちゃんをもらってくるようにって、あなたの娘さんにいわれて来ました。わたしたちの子どもをこねばちの中で寝かしつけてもらいたいんです」

母親は、水の中に向かってさけびました。

「豆ちゃん、おまえ、姉さんの所に行つて、姉さんの子どもを寝かしつけておやりすると、

「分かった、すぐ行くよ。にわとりたちにえさをやってからね」と返事がありました。そして、しばらくすると、海の中から、ひとりの小人がおんどりに乗って現れました。小人は、背たけがてのひらふたつ分で、引きずったひげは、てのひら三つ分の長さでした。

若者は、小人の豆ちゃんを連れて家に帰りました。豆ちゃんは、おんどりに乗って付

いて来ました。

「おれに何の用だい、姉さん」と、豆ちゃんはいいました。

「王さまの所に行つてほしいのよ。王さまにあんたのすがたを見せてほしいの。それがすんだら、王さまの目をつつき出して、わたしの夫を王さまにしてほしいのよ」

「いいよ。姉さん」

次の日、若者は、豆ちゃんを連れてお城に行きました。豆ちゃんは、

「王さま、何のご用でしょう」とききました。

「わしは、おまえのすがたを見たくて呼んだのだ」

「では、もう、ご覧になりましたか」

「ああ見た」

王さまがそういうと、豆ちゃんは、

「おんどりよ、飛べ、王の目玉をつつき出せ」といいました。おんどりは、飛んで、王さまの目をつつき出し、けり殺してしまいました。豆ちゃんは、大臣たちに、

「おれの兄さんを王さまにするか。それとも、おれのおんどりにつつかれたいか」といいました。

「そのかたを王さまにいたします」と、大臣たちは答えました。

こうして、若者は王さまになり、妻はお妃になりました。

ふたりは、今でも国を治めています。豆ちゃんも騎士として側近くにいて、お城の中を、おんどりに乗つて行つたり来たりしているそうです。

原話…『世界の民話4 東欧』飯豊道男訳／ぎょうせい
再話…村上郁